

# ある庶民感覚

曾野綾子

この紙面は、優秀な馬を育て、眺めて楽しむ方たちのためだということは知りつつ、敢えて馬の仲間の、労働をしているロバやラバのことを書きたいと思う。実は私が触ったことのあるのは、ロバかラバしかないのだから。

私はアフリカと係わって長いのだが、中近東・アフリカの諸地域で歴史を作ってきたのはロバであった。イエス時代の旅にはもっぱらロバかラクダが荷運びをしていたのである。

エジプトのルクソールで取材をしていた時、私は毎日、死者の町と言われるナイル川の対岸にある遺跡に行くのに、往生していた。船の中で何人ものオンボロ・タクシーの運転手たちに囲まれて、口々に自分のタクシーに乗れとしつこく言い募られるからである。もっともこうした人々を撃退する方法はエジプトでは比較的簡単で、「あなたはいくらで行くの?」といちいち聞いて、一番安い値段をつけた人の車に乗ればいいのである。

しかしこんな方法も、日本的感覚では結構めん

どうくさいものだ。しかももともと安いタクシー代を、こうして阿漕に値切ることになる。私は自分用のロバを一頭買おうかと考えた。一頭二万円だった。要らなくなったら、また売って帰ればいい。

しかしこの「名案」と思われたものは簡単に終わりになった。「曾野さんにロバなんてとうてい扱えませんよ」というわけだ。

ロバは「ギーコ、ギーコ」と啼いて、あまり素敵な動物ではない。しかし結構生活の達者で、扱い馴れていないと思う相手が来ると、金輪際動かない。頭はいいのだ。何しろ昼間は冬でも気温が摂氏四十度代。五十度になることもざらで、暑い季節には六十二度くらいまでは上がる。そんな厳しい気候の所で生き抜くコツは、人間も家畜も同じで、できるだけサボルことなのである。土地の男性は、言うことをきかないロバは棒でひっぱたいて歩かせたりするというが、ロバの方も利口で、強いものには逆らわず、弱いものはできるだけなめて言うことをきかないのである。

人も動物も生き延びるためには、あらゆることをする。それは知恵以上のもので、サラブレッドなどはその賢さに人間は惚れ込むのだろう。サラブレッドはいわば優等生だから、その思いに応じてやる楽しさがあるだろうが、私はロバやラバによって、庶民のずるさと強さを学んだのである。

エチオピアは高地が多くて、しかも台地と台地との間には自動車道路もない。一つの台地から次の台地に行くには、曲りくねった細いジャリ道を高度二百メートル分下り、また二百メートル分登る、という苦行を繰り返さねばならない。私は馬子つきのラバの背に一日中乗って移動した。自動車は使えない土地であのラバがなければ、私の体力では台地のかなたの村にはたどり着けなかった。そこには、現在の日本にはいないトラホーム患者たちが数百人、日本の医師の往診を待っていたのである。

## 曾野綾子(本名 三浦知寿子)

1931年 東京に生まれる。聖心女子大学英文科卒業。『遠来の客たち』が芥川賞候補となり文壇にデビューする。著書に『無名碑』『神の汚れた手』『天上の青』『狂王ヘロデ』『哀歌』『私の愛する妻』『貧困の僻地』『弱者が強者を駆逐する時代』他多数。

1979年 ローマ法王庁よりヴァチカン有功十字勲章、1993年 恩賜賞・日本芸術院賞、1997年 海外邦人宣教者活動援助後援会代表として吉川英治文化賞、読売国際協力賞を受賞。2003年 文化功労者となる。1995年から2005年まで日本財団会長、2009年10月日本郵政株式会社社外取締役。